

# Living the Lotus

Buddhism in Everyday Life

New Year's Issue



年頭法話

## まさら 真っ新たな一年

立正佼成会会長 庭野日鑑



人を育成することこそが最も重要  
創立百年に向け、真剣な取り組みを

あけまして、おめでとうございます。

年が明けて迎える新しい一日は、いわば生まれてから初めてのかけがえのない日です。何歳になろうとも、今日から先の日々は、初めて経験するまっさらな人生です。

中国の古典『大学』の中に「苟<sup>まこと</sup>ニ日ニ新タニ、日<sup>ひ</sup>ニ新タニ、又<sup>また</sup>、日ニ新タナリ」との言葉があります。

古代中国の名君が、毎日使う水盤（洗面<sup>うつわ</sup>の器）に、この銘<sup>めい</sup>を刻み付け、日々<sup>きざ</sup>唱えて、自ら<sup>いまし</sup>を戒めたと伝えられています。

私たちも、日々新たな心で、元気に生き活きと精進する一年にしたいものであります。

さて私は、昨年十一月の教団幹部会で「令和七年次の方針」を次のようにお示しました。

「人間が現実<sup>とど</sup>に留まらないで、限りなく高いもの、尊いもの偉大なものを求めてゆく、そこに生ずるの



「敬という心である。この敬の心が発達してくると、必ず相対的に自分の低い現実を顧みてそれを恥じる心が起きてくる。人間が進歩向上する一番大切なことは敬う心を発達させることであり、恥を知ることである。」

以上、先人の至言に示された大切な心を踏まえ、今年も私たちは信仰生活を通して、お互い様に、夫婦として、父母として、親として、未来を担う幼年・青年達を如何にして人道に導き、人間形成をはかるか、如何にして家を斉えていくか、さらに、日本の伝統を受け継いで立派な国を打ち立てていくか、日々生き活きと務めて参りましょう。

昨年とほぼ同様の内容ですが、本会会員として常に大事にすべきことです。

これまで私は、「人を植える（育てる）」という根本命題に全力を尽くしていきましようとして申し上げてきました。

中国古代の思想書である『管子』に「一年計画ならば穀物を植えるのがいい。十年計画ならば樹木を植えるのがいい。終身計画ならば人を植えるのに及ぶものがない」とあります。

地域社会や国、世界の未来を考えるならば、人を育成することこそが最も重要であるということです。

その基本は、何より家庭での教育にあります。齊家（家庭を斉えること）を通して、しっかりした人間教育がなされて初めて、学校での教育もより充実したものとなり、本当の意味で「人を植える」ということに結びつくからです。

東洋思想の泰斗として知られた安岡正篤先生のご著書に「父は子どもの尊敬の的でありたい。母は子どもの慈愛の座でありたい。なぜかなら、家庭は子どもの苗代だから」という言葉があります。稲の苗を育てる苗代が整っていなければ、秋の収穫など望むべくもないということでもあります。

こうした人づくりの原点となる役割を、人生の先輩である夫婦（若い世代）、父母（壮年の世代）、親（高齢の世代）がしっかり果たしていくことで、幼少年・青年達の人間性が自ずと育まれていきます。本会の創立百年に向けて、真剣に取り組んでいきたいと切に願っております。

また、かつて聖徳太子は、「和を以て貴しとなす」という言葉を十七条憲法の第一条に掲げられました。また歴史的に日本の国名は「大和」と称し、「大いなる平和」「大いなる調和」の精神を終始一貫することを国づくりの礎としてきました。こうした日本の伝統は、世界に相通じるものであり、その実現を目指して努力することが、私たちの大事な役割であります。

## 敬する、敬うことの肝心なところは 自己を敬する、自分を敬うこと

さらに、本年次の方針にある「敬の心」とは、すなわち偉大なる目標を持つ、進歩向上の願いを持つということです。未完成な自分に飽き足らず、少しでも高い境地に近づこうとする心です。

そのような敬の心が発達してくると、おのずと至





らない自分を省みて、恥じる心が生じます。そして、自らを戒め、律して、新たな努力・精進が始まるのです。

この敬の心には、より大事にすべきことがあります。敬する、敬うことの肝心なところは、自己が自己を敬する、自分が自分を敬うことでもあります。

自らの尊さを自覚できない人は、真の意味で他を敬することができません。自己の尊厳を知る人であって初めて、他の尊厳を知ることとなります。

そもそも私たちが、この世にいのちを頂いたことは、本当に奇跡的なことです。教育者の東井義雄先生がこう表現されています。

「自分の意志でこの世に生まれてきた人は一人もない。人は皆、何か知らない力によってこの世に生み出されてくる。賜った命であり、人生である」  
強く心に響く言葉であります。

同時に、私たちのいのちは、太陽をはじめ、月や星、山や川、空気や水、周囲の人々、動植物や虫、微生物や細菌までを含め、森羅万象の恩恵を全身に受けて生かされています。

自らのいのちを見つめれば見つめるほど、その尊さ、不思議、有り難さに身の引き締まる思いがします。

そして何より、人間は誰もが生まれながらにして仏の悟り、真実の道理を認識する能力を持ち、仏となる種子、つまり仏性を具えていると教えられています。

困っている人を見ると、何とかしてあげたいという気持ちがわき起こるのも、心の奥底に仏と同じ願いが具わっている証です。

日ごろ私たちは、仏さまを合掌・礼拝します。その私たちにも仏と同じ心が具わっています。ですから、仏さまを拜むことは、自分の中にある仏性を拜んでいることと一つのことです。

とかく私たちは、「自分は至らない人間だ」などと卑下しがちです。

しかし、私たちは皆、奇跡の塊ともいえる尊いのちを賜っていること。心の中に仏と同じ仏性を宿していること。そして一人ひとりが、真理・仏法を認識する能力も、自分で問題を解決する力も具えていること。このことを肝に銘じ、自信を持って精進することが、仏法に基づく生き方の根本であります。

曹洞宗の開祖である道元禅師の言葉に、「此一日の身命は尊ぶべき身命なり、貴ぶべき形骸なり。此行持あらん身心自らも愛すべし。自らも敬うべし」とあります。

この一日の生命は尊ぶべき生命である。尊ぶべき身体である。仏道を精進している身心を自らも愛しなさい、自らも敬いなさい、という意味合いです。

仏の道をひたむきに学び、実践しているわが身、わが心を尊んでいく——このことを自覚したいものであります。





## 数え八十八歳の「米寿」を迎え 共に生き活きと学び、実践したい

さて私は、本年三月二十日に満八十七歳、数えて八十八歳のいわゆる「米寿」を迎えます。

まさに神仏から賜ったいのちであり、天地万物に支えられて今日があることに心から感謝したいと思います。

人の親は父母二人ですが、祖父母、曾祖父母と三十代遡ると、その数は十億人を超えるといえます。想像もつかないほど数多くの先祖が、一度も途切れることなくいのちを繋いでくれたお陰さまで、私は、いま、ここに存在しています。

そうした悠久の生命の連鎖の中で、開祖さまは開祖さまとしての人生を歩まれて満九十二歳で入寂されました。母も母として満八十五歳の人生を全うしました。その両親のもとに生を享け、私は私としての人生を歩み、八十路の後半まで歳を重ねてきました。その意味では、一人ひとりが、いのちのバトンタッチをしているという気がしてなりません。



しかも一人ひとりには、おのおの個性があります。水泳に譬えればメドレーリレーのようなものでしょう。平泳ぎの得意な人もいれば、バタフライが得意の人もいます。それぞれがリレーのメンバーとして、与えられた一区間を精いっぱい泳ぎ続ける。そして最後は、そのバトンを次の人、つまり子や孫に託す。人生とは、そういうものではないかと受けとめています。

高齢になると何事も若い人のようにはできません。足腰も弱くなってきました。しかし頭脳の働きは、使えば使うほど向上するといわれています。

江戸後期の儒学者である佐藤一斎先生の次のような言葉があります。「少くして学べば壮にして為すあり。壮にして学べば老いて衰えず。老いて学べば死して朽ちず」

青少年の頃に学べば、壮年になって何事かを為すことができる。壮年になって学べば、老いてもその力は衰えることがない。老年になってなお学ぶことをやめなければ、たとえ命が尽きようとも、その人望や精神的な遺産は朽ちることがなく、次代に受け継がれていくという意味です。

一番大事なのは、人さまのためになるように、世界が平和になるようにという誓願を立てて学んでいくことでもあります。

人間は、学べば星が輝いているように、心中が明るく冴えてくるといわれます。

本年も皆さまと共に、生き活きと学び、実践して、釈尊の示された菩薩道（人道）を歩んでまいりたいと願っています。

(佼成新聞・令和七年一月号)